

# 看護学生の学科志望動機、人生の意味・目的意識、 性格特性の関連について

－PILとTEGの分析を通して－

齋藤和樹<sup>1)</sup> 小林寛幸<sup>2)</sup> 丸山真理子<sup>3)</sup>  
花屋道子<sup>4)</sup> 柴田 健<sup>2)</sup> 田多香代子<sup>3)</sup>

## The relationship between motives for course selection, purpose in life and personality traits of nursing students.

－Through Analyses by PIL and TEG－

Kazuki SAITO Hiroyuki KOBAYASHI Mariko MARUYAMA  
Michiko HANAYA Ken SHIBATA Kayoko TADA

**要旨：**職業意識や人生の意味・目的意識がある程度はしっかりした看護学生に対しての適切な教育を考える手がかりとして、本学看護学科の学生に学科の志望動機を調査する質問紙、PIL、TEGを実施した。その結果、志望動機に関して、「資格」「社会貢献」「適性」「夢・憧れ」「将来展望」「家族」「能動」の7因子を抽出した。動機得点とPIL得点の平均値の学年間比較では、1年生が2・3年生に比べて有意に高く、社会貢献、適性、将来展望という主観的要素が強く影響する因子が1年生で有意に高かった。このことから、看護職に対する1年生の現実認識の甘さと、2・3年生では、それが修正されていることが推測された。一方、夢・憧れ、能動といった因子は学年間で差がなく、これらは修正されることなく持ち続けると考えられた。また、全体の志望動機得点とPIL得点の合計には相関が認められ、性格特性としては、NPが高いことが看護学生の特徴として示された。

**キーワード：**看護学生、学科志望動機、PIL、TEG

**Summary :** We researched motives for course selection, purpose-in-life and personality traits of nursing students whom we assumed to have vocational intentions and a clear purpose-in-life. We found seven factors of motives for course selection by factor analysis. These factors include “RN license”, “contribution to society”, “vocational aptitude”, “dream and yearning to be a nurse”, “future perspective”, “family” and “activity”. The scores of motives for course selection and the purpose-in-life test given to the first year students were significantly higher than those of other students. On the factors of “contribution to society”, “vocational aptitude” and “future perspective”, the first year students again got higher points than other students. As the results, we may assume that the first year students still have optimistic dreams about their profession, whereas the second and third year students may have adjusted to their optimistic dreams in future. On the other hand, there are no differences in the scores of “dream and yearning” factors among the three grades of students. The scores of motives for course selection and PIL show a positive correlation. The mean average score for NP was the highest in the TEG profile.

**Keywords :** nursing students, Course entrance motives, PIL, TEG

---

1) 看護学科講師 2) 秋田県中央児童相談所心理判定員  
3) 秋田赤十字病院臨床心理士 4) 弘前大学教育学部助教授  
本研究は平成10年度共同研究費助成によるものである。

## I. はじめに

職業選択など将来の展望を持つことが迫られる青年期において、自分の人生の目的や意味などを考えることは重要である。本学看護学科の場合、多くの学生が将来看護職に就くことを希望しており、職業意識や人生の目的・意味がある程度明確であると思われる。また、看護というのは、個々の性格や適性といった要素が強く関係する職業であり、入学後の教育がそれらに及ぼす影響もかなりのウエイトを占めるのではないかと考えられる。

したがって、看護教育においては、学生の持つ人生の目的意識や性格を的確に把握し、さらに、それらにあった教育を施したり、洗練していく教育が必要となる。そのような教育を考える手がかりとして、こうした職業を志向する学生にとって学科志望動機、人生の意味・目的意識や性格特性がどのような意味を持つのか、それらの関連はどのようなものであるのかを調べたいと考えた。また、動機づけの高下や、入学後の教育に対する受け止め方によって学生生活における手応えや意味・目的意識の持ち方は影響を受けるものと思われる、学年間で比較することによって何らかの傾向があるか否かも明らかにしたい。

本学の志望動機については、酒井ら(1996,1997,1998)の調査があるが、われわれはそれらを参考に看護学科の志望動機を調べる質問紙を作成し調査した。人生の意味・目的意識についての調査には、P I Lテスト(the Purpose-in-Life Test)を用いた。P I Lは、Frankl, V. E.のLogotherapyの理論に基づいて人生の意味・目的意識を数量的に測定するために、Crumbaugh, J. C.とMaholik, L. T.によって考案されたものである。性格特性はT E G(東大式エゴグラム第2版)を用いて調査した。

## II. 研究目的

- 1) 看護学科の学生の学科志望動機を調査して、因子分析する。
- 2) 学年によって学科志望動機がどうかの横断的調査をする。
- 3) 学年によってP I L得点(パートAのみ使用:以下P I L得点とする)に違いがあるかを調査する。
- 4) 看護学科への志望動機と生きがい得点との関係を調べる。
- 5) 看護学生の性格をT E Gを用いて調査する。

6) 看護学生のT E Gの性格特性と生きがいの関係を調査する。

7) P I L得点の高下によって学科志望動機得点と性格特性に違いがあるかを調べる。

## III. 研究方法

対象:日本赤十字秋田短期大学看護学科の学生222名(1年84名、2年72名、3年66名)。平均年齢は、1年生は18.9歳、2年生は19.5歳、3年生は20.5歳であった。なお、分析に使用したのは、女子学生のみデータである。

方法:4月の授業中に、自作した学科志望動機に関する質問紙(28項目の5段階尺度)、P I L(20項目の7段階尺度)とT E Gを学生に配布し学籍番号を記入させた後、回答を求め回収した。

## IV. 結果

1) 学科志望動機の因子分析:学科志望動機に関しては因子分析を行い、バリマックス回転の結果、7つの因子を抽出した(表1)。

第I因子は、資格に関する項目で構成されており、「資格因子」とした。第II因子は、社会や他者に対する貢献に関する項目から構成されており、「社会貢献因子」とした。第III因子は、体力や能力的な適性に関する項目で構成されており、「適性因子」とした。第IV因子は、看護学に対する夢や憧れに関する項目で構成されており、「夢・憧れ因子」とした。第V因子は、本学での勉強をさらに将来に生かしていく項目から構成されており、「将来展望因子」とした。第VI因子は、家族が看護に関係することに関しての項目から構成されており、「家族因子」とした。第VII因子は、自ら能動的に動くという項目から構成されており、「能動因子」とした。

以上の7因子について、それぞれの因子を構成する項目の平均点をとり、動機因子得点とした。

2) 学科志望動機得点の学年間比較:学科志望動機得点(学科志望動機質問紙の合計点:以下、志望動機得点)を学年間で比較した結果、1年生は2・3年生に比べて有意に高く、2・3年生間では差はなかった(表2)。

表1 志望動機得点の因子分析

因子名	項 目	1	2	3	4	5	6	7
資格因子	資格があれば有効だから	,8375	-,0601	,0857	,0791	,0423	,0966	,0379
	職に困らないから	,7922	,1805	-,0245	-,0980	-,0374	,0345	-,1419
	資格がほしかったから	,7882	,0322	,0121	,0198	,1588	,0480	,2274
	国家資格だから	,7650	-,0079	,1436	,0897	,0377	-,0163	,1102
社会貢献因子	社会の役に立ちたいから	,0309	,8111	,0984	,1314	,0183	,0884	,1362
	看護婦として社会に貢献したいから	,0044	,6464	,1210	,4167	-,1346	,1866	,0776
	人の世話をしたいから	-,1050	,5861	,3458	,2208	-,0408	,1289	,2344
	もっとも必要とされている仕事だから	,3579	,4950	,3107	,0694	,1960	-,0103	,0912
	看護婦になって地元貢献したいから	,1558	,4826	,1910	,3543	,0125	,2834	,0394
適性因子	体力に自信があるから	,0435	,0586	,8386	,0029	,0192	,0695	-,0439
	体を動かすのが好きだから	,0301	,2740	,6853	,1922	,0547	,0357	,1251
	有能な助手として働く自信があるから	,3845	,1348	,6038	,0991	,0713	,2069	,0820
	人と関わることが好きだから	-,1219	,3398	,4580	,0522	-,0128	,0148	,4243
	自分の裁量のできる範囲が大きい仕事だから	,1656	,3626	,3956	,1741	-,1005	,0927	,1983
夢・憧れ因子	看護婦になるのが夢だから	-,0319	,3110	,1448	,7368	-,3463	,0061	,0544
	看護という職業に憧れていたから	,0380	,3709	,1214	,7126	-,7126	,0255	,0008
	体験看護学習などの看護学にふれる機会があったから	,0653	,0233	,0381	,6549	,1661	,1261	-,0353
	看護学を学びたいから	-,0070	,3493	,0715	,5377	,2547	,1379	,2081
将来展望因子	将来保健婦や養護教諭などの看護学を生かせる職業に就きたいと思うから	,1009	,1181	,0349	,0141	,8344	,0771	-,1052
	さらに進学を考えているから	,0901	-,0036	,1163	-,0396	,7617	-,1500	-,0807
	看護学を看護婦とは別の職業に生かしていこうと思ったから	,0000	-,1685	-,0963	-,0252	,6223	,2451	,2580
家族因子	家族(自分を含む)が何らかの形で看護を受けたことがあったから	-,0097	-,0131	,2738	,1572	,0206	,7553	,0931
	家族が入院したとき手助けできなかったから	,0065	,1419	-,0343	,0546	,0283	,7543	-,0314
	病気の家族の世話ができるようになりたいから	,2297	,3549	,0985	,0343	,0592	,6155	,0037
能動因子	目的なく進学や就職をするのがいやだったから	,1400	,2176	-,0678	-,2402	-,0423	-,0582	,6647
	看護婦に関する新聞記事・書籍などを読んだから	,1211	,1720	,1580	,4071	,0377	-,0575	,6041
	人の手伝いが得意だから	,0664	,1401	,4890	,0723	,0247	,1313	,5272
	自分が看護を受けてなりたと思ったから	,0873	-,0581	,2671	,2842	-,0435	,2875	,4352

主成分分析 (バリマックス法)

3) 動機因子得点の学年間比較：貢献因子と適性因子において、得点の平均値が1年生は2・3年生に比べて有意に高く、2・3年生間では差はなかった。将来因子では、1年生は2年生よりも有意に高く、2年生は3年生よりも有意に高い(表2)。つまり、得点の平均値は学年が上がるごとに低下する。

4) P I Lの学年間比較：P I L得点の平均値を学年で比較した結果、1年生は2・3年生に比べて有意に高く、2・3年生間では差はなかった(表2)。

これらの傾向は菊地(1996)や小林(1997)の研究と一致した傾向を示すが、それらの研究

と比較すると、本研究での対象となった看護学生は全体的にP I L得点が高いという特徴を持っている。

また、学年ごとに志望動機得点を比較すると、1年生が2・3年生より有意に高い得点を示している。各動機因子を学年間で比較すると、貢献因子・適性因子で1年生が2・3年生より有意に高い得点を示している。

5) 志望動機得点とP I Lの相関：全学年の志望動機得点とP I L得点の合計には、中程度の正の相関が認められた( $r=.394$ )。また、各動機因子得点とP I Lの相関を見ると、社会貢献因子( $r=.424$ )、適性因子( $r=.386$ )、夢・憧れ因子

表2 PILと動機得点の学年間比較

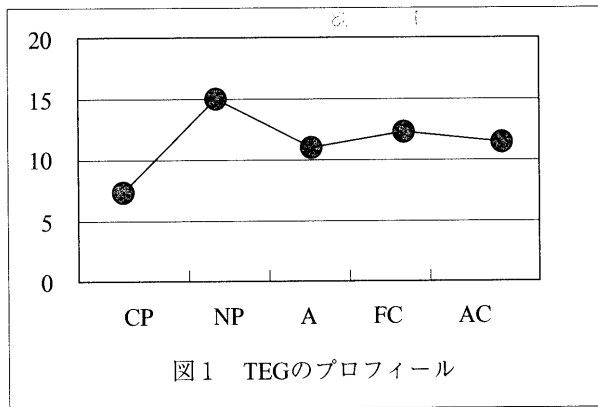
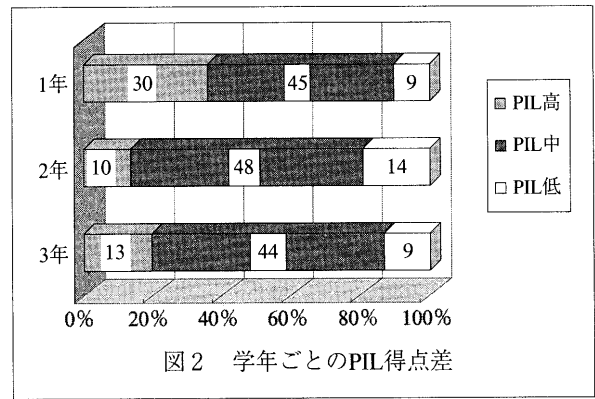
学年		PIL	動機 得点	資格	社会 貢献	適性	夢 憧れ	将来	家族	能動
1年	平均値	102.81	95.63	3.53	3.77	3.47	3.52	3.05	3.42	2.95
(N=84)	SD	15.65	12.17	0.87	0.70	0.76	0.76	1.01	0.82	0.82
2年	平均値	92.15	89.49	3.73	3.39	3.01	3.28	2.94	3.31	2.67
(N=72)	SD	15.63	15.26	0.92	0.77	0.78	1.07	0.96	1.09	0.92
3年	平均値	96.02	86.52	3.36	3.41	3.09	3.16	2.54	3.19	2.69
(N=66)	SD	17.29	17.98	1.20	0.92	0.80	1.06	1.00	1.03	0.87
合計	平均値	97.33	90.93	3.55	3.54	3.21	3.34	2.86	3.31	2.78
(N=222)	SD	16.70	15.50	1.00	0.81	0.80	0.97	1.01	0.98	0.87
Oneway		**	**		**	**		*		
学年間		1>2**	1>2*		1>2**	1>2**		1>2**		
多重比較		1>3*	1>3**		1>3*	1>3*		2>3*		

\*p<.05 \*\*p<.01

表2 PILと動機得点の学年間比較

学年		CP	NP	A	FC	AC
1年	平均値	6.71	15.02	10.87	12.38	11.14
(N=84)	SD	3.94	3.69	3.72	3.96	4.51
2年	平均値	8.56	13.93	10.83	12.21	11.93
(N=72)	SD	4.60	3.71	4.19	4.50	4.33
3年	平均値	7.24	15.23	10.26	12.23	11.21
(N=66)	SD	3.95	3.43	4.14	3.80	4.66
合計	平均値	7.47	14.73	10.68	12.28	11.42
(N=222)	SD	4.22	3.65	3.99	4.08	4.49
Oneway		*				
学年間		1<2*				
多重比較						

\*p<.05 \*\*p<.01



( $r=.365$ )、能動因子 ( $r=.308$ ) で中程度の相関が得られた (いずれも  $p<.01$ )。

6) TEGのプロフィール：全体のTEGの得点を見ると、 $NP > FC > AC > A > CP$ のプロフィールが得られた (表3・図1)。

7) TEG得点の学年間比較：CPにおいて、2年生は1年生より有意に高かった。しかし、他の尺度や他の学年間では差はなかった (表3)。

8) TEGとPILの相関：CP ( $r= -.378$ ) と

AC ( $r= -.461$ ) において、PILとは有意な逆相関が認められた (いずれも  $p<.01$ )。

9) PIL得点差による分類：PILハンドブック (1998) に記載されているPIL-A診断基準に基づき、PIL得点の高い群 (H群)・中程度の群 (M群)・低い群 (L群) に分類した。なお、H群はPIL得点が110点以上、M群は80~110点、L群は80点未満である。

その結果、1年生でH群の割合が多く、2年生でL群の割合が多くなっている (図2)。

10) PIL得点差と志望動機得点の比較：PIL得点が高ければ、志望動機得点も高くなるという結果が示されている。また、貢献因子、適性因子、夢・憧れ因子、能動因子でも同様の結果になっている。

11) PIL得点差とTEGのプロフィール：PIL得点をH群、M群、L群に分けてTEGのプロフィールを比較すると、CPにおいて  $H < L$ 、 $M < L$  となり、有意な差がある ( $p<.01$ )。NPにおいて、 $H > L$ 、 $M > L$  となり有意差がある

表4 PIL得点群ごとの動機得点の比較比較

		PIL	動機 得点	資格	社会 貢献	適性	夢 憧れ	将来	家族	能動
N群	平均値	117.62	98.40	3.53	3.87	3.60	3.80	2087	3.52	3.13
(N=53)	SD	5.71	11.80	1.01	0.67	0.72	0.73	0.99	0.88	0.85
M群	平均値	96.15	90.62	3.50	3.58	3.17	3.31	2.87	3.29	2.80
(N=32)	SD	7.91	14.84	0.99	0.72	0.76	0.95	0.99	0.96	0.82
L群	平均値	68.78	79.88	3.79	2.84	2.72	2.68	2.81	3.05	2.15
(N=32)	SD	10.40	17.09	1.06	0.97	0.84	1.00	1.15	1.16	0.79
合計	平均値	97.33	90.93	3.55	3.54	3.21	3.34	2.86	3.31	2.78
(N=222)	SD	16.70	15.50	1.00	0.81	0.80	0.97	1.01	0.98	0.87
Oneway		**	**		**	**	**			**
群間		H>M**	H>M**		H>M**	H>M**	H>M**			H>M*
多重比較		H>L**	H>L**		H>L**	H>L**	H>L**			H>L**
		M>L**	M>L**		M>L**	M>L*	M>L*			M>L**

表5 PIL得点群ごとのエコグラム得点の比較

PIL度	CP	NP	A	FC	AC
H群 平均値	5.83	15.75	11.64	12.57	8.87
(N=53) SD	4.13	3.99	4.07	4.31	4.69
M群 平均値	7.31	14.82	10.61	12.51	11.77
(N=137) SD	3.80	3.41	3.77	3.78	4.13
L群 平均値	10.84	12.63	9.34	10.81	14.13
(N=32) SD	4.30	3.28	4.49	4.71	3.58
合計 平均値	7.47	14.73	10.68	12.28	11.42
(N=222) SD	4.22	3.65	3.99	4.08	4.49
Oneway	**	**	*		**
学年間	H<L**	H<L**			H<M**
多重比較	H<L**	H<L**	H<L*		H<L**
					M<L*

\*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01

(p<.01)。Aにおいては、H>Lで有意な差がある (p<.01)。FCにおいては、各群間で差は見られなかった。ACにおいて、H<M (p<.01)、H<L (p<.01)、M<L (p<.05) となり有意な差があった。なお、H群とM群は似たプロフィールを示すが、L群は他の2群と異なり、FCよりもACが高いプロフィールを示した (表6、図3)。

## V. 考察

1年生の動機得点とPIL得点の平均値が2・3年生に比べて有意に高い。また、1年生の動機因子得点では、社会貢献因子と適性因子における得点の平均値が他の学年よりも有意に高い。将来展望因子においても学年が上がるごとに平均値は低下している。これらのことは、他の学年に対する1年生の特異性を示しており、1年生が最も強い動機と意味・目的意識を抱いていることを示している。つまり、入学間もない新入生の希望に燃えた姿がうかがわれる結果となっている。しかし、動機得点の平均値が高いということは、一人の学生が多種の動機を持っているということも考えられる。

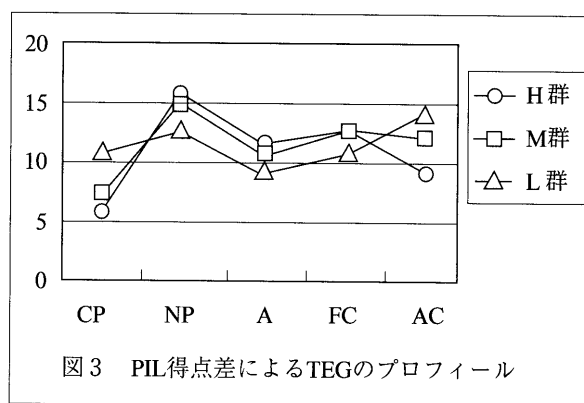


図3 PIL得点差によるTEGのプロフィール

動機因子のなかで1年生と2・3年生間に有意差の認められたのが社会貢献、適性、将来展望という主観的要素が強いと考えられる因子である。看護職として社会に貢献できるか、自身が看護職に向いているか、本学での勉強を将来に生かせるか、といった看護に対する主観的要素は、様々な経験や学習をしたり、現実を認識するにつれて、修正されていくものと考えられる。こうした要素が1年生で有意に高いという結果は、1年生の看護職に対する認識の甘さを示し、2・3年生ではそれが修正されていることが推測される。

しかし、夢・憧れ、能動といった思い入れともいえる主観的強く影響する因子の平均点は学年間で有意差がない。こういった因子は学年を経ても修正されることなく持ち続けると考えられ、本学看護学生たちの看護職に対する動機の強さが示されていると言えるだろう。

一方、資格、家族という因子は、資格取得という客観的事実や家族の被看護体験という観察に基づく現実認識によって構成されたものである。これらに学年間で有意差が見られなかったことは、客観的・現実的な学科志望動機は学年が変わることで変動しないことを示す。このような志望動機

を持って入学してきた人は、在学期間を通してその動機を持ち続けるかもしれない。

全体の性格特性として特徴的なことは、TEGにおけるNPの高さである。これはケアすることを学んでいる看護学生にとって、優しさや共感性の高さとして望ましい特質と言える。

PIL得点をH群・M群・L群に分類し、動機得点で比較すると、 $H > M > L$ となっており、それぞれに有意差が認められ、社会貢献、適性、夢・憧れ、能動因子においても同様の結果となっている。このことは、看護学生の生きがいや意味・目的意識と、主観や主体性が強く影響すると考えられる志望動機は、ある程度一致した動きをしている。

また、PIL得点差ごとに性格特性を比較すると、NPにおいては $H > M > L$ となっておりPIL得点が高いほどNPは高く、逆にCPとACにおいては $H < M < L$ となっておりPIL得点が高いほどCP・ACで有意に高い得点となっている。同様の傾向としてCPとACにおいてPILと逆相関が認められたが、これはCPの特徴である秩序の維持や理想追求といった批判傾向や、ACの特徴である従順で控えめな消極性という主体性の欠如が、人生の意味・目的意識を見いだすことを阻害するものとなっている可能性を示唆している。

#### おわりに

本研究では看護を志す看護学生の学科志望動機、人生の意味・目的意識、性格特性の関連を実態調査的に明らかにした。中でも、学科志望動機が現実的になっていく中で、夢・憧れのような志望動機を学生が持ち続けることは、教育者にとって大きな励みとなる結果とも言える。しかし、実際にこのような学科志望動機と、看護に対する目的意識がどう変わっていくか、ということについては、縦断的研究などでより詳しく見ていく必要があるだろう。また、本研究の中では死生観のような看護職に深い関わりのある人生への態度についての考察を行うことはできなかった。看護学生の目的意識や死生観、性格特性の特徴を教育に生かしていくためには、縦断的研究に加えてPILテストのパートB・Cの分析のような質的な研究が必要と考えられる。従って、今後も継続的に研究を続けていきたい。

#### 文 献

1. 菊地和子：看護学生の病気についてのイメージに関する研究，岩手大学人文社会科学研究所研究紀要，第6号，pp.97-106，1998.
2. 小林寛幸：青年の意味・目的意識についての心理学的研究—自我同一性発達との関連性の検討—，岩手大学大学院修士論文未公開，1998.
3. 佐藤文子監修：PILハンドブック，システムパブリカ，1998.
4. 酒井志保，滝内隆子，佐々木真紀子，大島弓子：看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態—本学看護学科1期生の入学時調査から—，日本赤十字秋田短期大学紀要，No.1，pp.77-82，1996.
5. 酒井志保，滝内隆子，大島弓子，佐々木真紀子，南雲美代子：看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態（第2報）—本学看護学科2期生の入学時調査から—，日本赤十字秋田短期大学紀要，No.2，pp.33-41，1997.
6. 酒井志保，大島弓子，滝内隆子，佐々木真紀子，南雲美代子：本学看護学科学生の学校および看護学科選択理由の検討—本学看護学科3期生と2期生の入学時調査を比較して—，日本赤十字秋田短期大学紀要，No.3，pp.45-51，1998.